



南 州 市 入 糶 2018

第13号



第21回オープン収蔵展示コラム

長崎の出土品にみる文字ーもじ・モジ・Mojiー

未報告資料の紹介



『長崎の出土品にみる文字—もじ・モジ・Moji— 未報告資料の紹介』

長崎県埋蔵文化財センター 調査課 宮木 貴史

発掘調査によって、遺跡から膨大な数の出土品が発見されます。発掘調査が終わると、出土品を洗って、割れた破片をくっつけて、図面を書いて、報告書にまとめて世に送り出します。しかし、ひとつの遺跡から発見されたすべての出土品を報告書に収めることはとてもできません。一度土の中から発掘された出土品ですが、収蔵庫の中で再び埋もれてしまうのです。

今回、「長崎の出土品にみる文字」をテーマにオープン収蔵展示を開催するにあたって、収蔵庫で埋もれていた資料にも目を向けてみました。すると、報告されていない資料（未報告資料）の中にも文字の書かれた出土品を再発掘することができたので、その一部をご紹介します。

満洲文字が描かれた磁器

長崎市に位置する炉粕町遺跡の出土品から1点、長崎奉行所跡の出土品から1点、清朝銭が描かれた磁器が発見されました。

炉粕町遺跡の1点（炉粕町資料1）は、中国景德鎮製のお皿です。この資料については、既に報告文がでています（古澤義久 2017「磁器に描かれた清朝銭の表現における景德鎮と肥前の比較」『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料』）が、ここでも紹介します。口径15.2cm、高台径8.8cm、高さ2.9cmで、外面に清朝銭が描かれています。清朝銭とは、その名の通り、かつての中国（清・1644-1912）で使われていたお金です。清は、満洲民族という中国の



写真1 炉粕町資料1 外面清朝銭文

東北地方に住んでいた民族によって建国されました。満洲民族は、「満洲文字」という文字を発明しており、清朝銭の裏面にも満洲文字が使われました。炉粕町資料1には、清朝銭の裏面が描かれています。ところが、炉粕町資料1に描かれた満洲文字は正しい文字ではありません。このことについては、展示や既報告文（古澤2017）で説明がされているので、詳しく知りたい方は、そちらを参照してください。

長崎奉行所跡の1点（奉行所資料1）は、肥前系の磁器碗です。口径8.6cm、高台径4.4cm、高さ6.5cmで、外面には方形の穴がある丸いお金（方孔円銭）の文様が描かれています。5つの文様が残存し、そのうちの1つに満洲文字が描かれています。右半分が隠れており、見えているものは左側の文字だけです。文字は「宝」を満洲語読みした「ᡩᠪᡠᡳ(boo)」が描かれています。炉粕町資料1の文字と比べても分かる通り、この文字は本来、清朝銭に書かれる文字より角ばってデザインされ

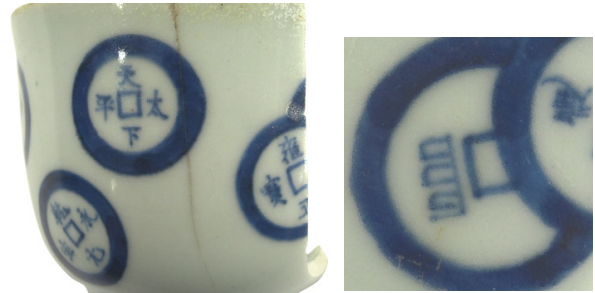


写真2 奉行所資料1 外面方孔円銭文

ています。

その他の方孔円銭文には、「天下太平」「雍正（通）寶」「乾元永宝」「道光通（寶）」と描かれています。このうち、「天下太平」は、まじない用の銭で、「乾元永宝」は、実際の清朝銭にはありません。

以上、陶磁器に描かれた図案の中に満洲文字が隠れていた事例を紹介しました。満洲文字については、展示内で解説していますので、是非ご覧ください。

「赤壁賦」の描かれた磁器

磁器には、漢詩とその漢詩が表す風景が描かれたものがあります。そのなかに、蘇軾（そしよく）という人が詠んだ「赤壁賦（せきへきのふ）」が描かれたものがあります。この詩は、蘇軾が長江（中国随一の川）にて友人と舟遊びをした際に詠んだもので、川に船を浮かべた画とともに磁器に描かれています。

この赤壁賦が描かれた磁器が、未報告資料の中に4点ありました。長崎市に位置する万才町遺跡の出土品から2点（万才町資料1・2）、長崎奉行所跡の出土品から2点（奉行所資料2・3）です。

万才町資料1は、磁器の急須です。口径6.6cm、底径5.5cm、高さ5.7cmで、外面いっばいに赤壁賦が描かれています。注ぎ口側は欠損しています。取っ手も欠損していますが、接合面に接合を良くするためのキザミが施されていることが分かります。蘇軾の赤壁賦には、夏ごろに訪れた時の詩（前赤壁賦）と冬ごろに再び訪れた時の詩（後赤壁賦）がありますが、この資料に描かれているのは後赤壁賦です。

万才町資料2は、磁器の碗蓋です。口径8.6cm、つまみ径3.4cm、高さ2.7cmで、外面の約半分は赤壁賦が、もう半分には、舟遊びをしている風景が描かれています。残存部分に、「歩自雪堂」「將歸於臨皋」「二客從予」「人影在地」「仰見明月」「顧而樂之」と描かれていることから、後赤壁賦が描かれていることがわかります。



写真3 万才町資料1

奉行所資料2は、磁器の皿です。底部と高台が一部残っている程度ですが、高台径は10cmほどに復元されます。「誦明月之詩」の1節が読めることから、前赤壁賦が描かれていたことが分かります。欠損している部分には、長江で舟遊びをし



写真4 万才町資料2

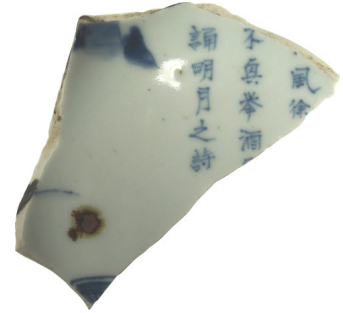


写真5 奉行所資料2

ている蘇軾達の姿が雄大に描かれていたことでしょう。

奉行所資料3は、磁器碗です。口径15.6cm、底径6.8cm、高さ7.3cmで、外面いっばいに赤壁賦が描かれています。残存部には、「二客從予」や「仰見明月」などの文字が見られることから、後赤壁賦が描かれていることがわかります。残存しているのは、外面の3分の1程度であり、欠損部には船遊びの絵が描かれていたことでしょう。



写真6 奉行所資料3

これらの資料は、一支国博物館内の収蔵庫にて保管されていました。バックヤードツアーの際に見学することができますが、この収蔵庫には約15,000箱のコンテナケースが収蔵されています。そのなかでも、長崎市内の遺跡から出土した陶磁器類を収めたものが特に多く、一箱一箱がとても重いです。そんな重い箱を棚から降ろし、陶磁器の割れた破片で手を切らないように注意しながら、中を確認しては戻すという大変な作業を展示スタッフで行いました。未報告資料のほとんどは、判別もできないような破片資料であったり、文字ではない図案が描かれたものでした。そんな中から、どうにか方孔円銭が描かれた碗や、赤壁賦が描かれた磁器などを再発掘でき、展示を通してご紹介できたことは大変うれしく思います。

今回ご紹介したもの以外にも、未報告資料の中から再発掘したものを展示しています。カタカナで「メートル」「リットル」などの単位が描かれた磁器や、「てまりあそび」などと描かれた三河内焼の「卵殻手（エッグシェル）」なども実は未報告資料です。どこかの機会でご紹介できたらと思います。

収蔵展示の紹介

最後に現在開催中の第21回オープン収蔵展示「長崎の出土品にみる文字ーもじ・モジ・Mojiー」について簡単にご紹介します。

今回の展示では、「文字」をテーマに長崎で発見された出土品に書かれた文字達をご紹介します。長崎は古くから交易の窓口であったので、さまざまな文字が入りしてきました。

一番多いものはもちろん「漢字」です。特に古い文字は、「貨泉」や「五銖銭」といった中国からもたらされたお金です。このうち貨泉は、紀元前後の15年間続いた、中国の新という時代のお金で、日本では弥生時代の遺跡で出土します。貨泉・五銖銭の後、時代は飛んで江戸時代のお金を主体に展示しています。「寛永通宝」という名前は聞いたことがあるかもしれませんね。多くの遺跡から出土する「寛永通宝」ですが、種類もいくつかありますので、展示の中でその違いを探してみてください。

弥生時代の後に続く古墳時代の文字として、壱岐市にある掛木古墳から出土した銅鏡を展示しています。この資料は、長崎県埋蔵文化財センターにて、透過X線撮影（レントゲン撮影）を行った

ことで、どんな文字が刻まれているか判明しました。

透過X線撮影とは別の方法で、文字を見つけ出すものがあります。赤外線カメラです。湿潤な土地に位置する遺跡などでは、木製品などの有機物が、腐ってなくならずに残っていることがあります。そこに墨を用いて文字が書かれていた場合、肉眼では分からなくても赤外線カメラで撮影をしてみると、文字を見つけることができます。展示の中では、主に荷札と思われる木製品をご紹介します。

その他、陶磁器に描かれた文字を主に展示していますが、中でも陶磁器によく描かれた「福」「寿」「大明年製」という文字をたくさん集めてみました。字体も書き方もさまざまな文字達を、是非楽しみながらご覧ください。

また、ローマ字が描かれた出土品もご紹介しています。江戸時代の長崎は、ご存知の通り、出島を舞台とした貿易の窓口でした。交易品のひとつに、「VOC 皿」や「コンプラ瓶」といったものがあります。「VOC」は「オランダ東インド会社」の略号で、海外向けの輸出品にこの略号が描かれました。「コンプラ瓶」は、醤油やお酒などを輸出する際の容器として使われていたものです。オランダ語の「JAPANCH」「ZOYA」などが描かれています。他にも海外からの輸入品であるクレーパイプ（粘土でできたキセル）も展示しています。

文字をテーマとして、さまざまな出土品を一同に集めてみました。この機会に是非ご覧ください。

第21回 オープン収蔵展示

「長崎の出土品にみる文字

ーもじ・モジ・Mojiー

期間：2018年3月9日（金）

～2018年9月2日（日）

場所：壱岐市立一支国博物館 1F・

オープン収蔵庫

内容：長崎の出土品に書かれた文字たちを紹介しています。

【観覧無料】

